四季—志木自然報告—

Shiki Seasonal Nature Reports 2020

Cover Story

【文学の生き物】 『アルプスの少女ハイジ』の犬、ヨーゼフ

アルプスの山、おじいさん、ペーターにクララ。最近は某CMでもみたことがある人が多いのではないでしょうか。そう、『アルプスの少女ハイジ』です。今日はその『ハイジ』に登場する私が愛してやまない犬、ヨーゼフをご紹介したいと思います。

日本ではアニメが有名ですが、原作はヨハンナ・シュピリというスイスの女性作家によるものです。原作は2部構成で、『ハイジの



修行時代と遍歴時代』(1880)、『ハイジは習ったことを役立てることができる』(1881)という、なんとも言えないタイトルでした。原作では「キリスト教とハイジの人間的成長」が大きなテーマになっています。アルプスの自然の中でのびのび育ったハイジは天真爛漫で素朴な性格でしたが、神を信じるということを知りません。しかしフランクフルトで厳しい教育を受け、文字が読めるようになり、信仰を得て立派な人間に成長しました。このように、原作とアニメ版にはいくつか違いが存在します。

その一つに、アニメに登場する犬、ヨーゼフが挙げられます。ヨーゼフはいつも昼寝をしている 泰然自若とした犬なのですが、好物のカタツムリに目がなかったり、嬉々として山を走り回ったり と、いい味を出しています。ヨーゼフのモデルとなったのはセント・バーナードという世界最大級 の犬です。オスで体高90センチ、体重80キロ以上の個体もいるというのですから、すごい迫力です。 この犬種はスイスの雪山遭難救助犬として活躍しており、遭難者の体をあたためるために首からラ ム酒を入れた樽を下げた姿も有名です。垂れた耳、垂れた目、どっしりした手足、たくましい筋肉 質な体を持っていますが実は甘えん坊な性格の子も多く、そのギャップがたまりません。



しかしこのヨーゼフ、実は原作には一切登場しない、アニメ版のオリジナルキャラクターです。アニメ『アルプスの少女ハイジ』は高畑勲が総合演出を担当しており、日本受けするようにかなり内容を変更ました。原作を52回分のアニメとして放送したので、ヨーゼフというキャラクターも登場したのかもしれません。ほかにも、原作ではおじいさんの衝撃的な過去が明かされたり、羊飼いペーターの性格がアニメと大きく違っていたりと、いろいろな衝撃があります。日本語訳も出ていますので、興味があればぜひ一度読んでみてください。

「ヨーゼフ」のモデルとなったセント・バーナード

(Kurita)

この夏休み、新しくCampbell社製の複合気象観測装置を設置しました。ラグビー場の奥、ソフトテニスコートの脇にある百葉箱の横に立っている白い箱の胴体と白い頭、三本足、地中に埋め込まれた三本の尾っぽと、百葉箱に続く一本の尾っぽ(写真)がそうです。

観測項目は、気温、気圧、水蒸気圧、相対湿度、風向、風速、日射量、雨量、落雷回数、落雷距離を白い頭(気象センサー部)、三本の地中に埋まる尾っぽはそれぞれ50cm、1m、2mまで埋まっていて地中の温度を測定しています(地温センサー部)。測定はすべて自動的に数秒ごとに行われ、10分ごとに記録されます。観測データは白い箱の胴体にあるデータロガーに記録されます。データはExcelなど汎用のソフトでも閲覧できます。

自動的に測定とはいいますが、野外観測ではメンテナンスフリーということはありません。これまでも理科棟の屋上で自動気象観測 (Davis社製) を20年以上行っていますが、雨量計の器に木の実のようなもの飛んできたり、近年では風向風速計を志木カラスが遊び道具にしてしまっていたり、いろいろなことが起きています。

今回のCampbellでも、ラグビー場に沿った欅並木のわりと近くに設置したこともあり、木から小さなゴミがパラパラと降ってくるようです。でもこれは想定したことで、定期的に清掃することで観測には問題がなさそうです。

設置直後に予想外の事件が起きました。9月上旬の雷雨です。9月2日、設置していただいた太陽計器さんとたまたまデータチェックをしていたときです。午後2時半ごろ突然の100ミリを超えるような雷雨が志木を襲いました。Campbellには落雷センサーも搭載しているので、これはデータがとれるチャンスだ!と話していました。実際、周辺の落雷回数68回、1km未満の至近距離の落雷回数も50分間にわたり多数と記録されました。10分間の最大雨量は24ミリ(=1時間換算で144ミリ)の局地的な大雨が観測されました。問題はその後でした。予備のバッテリー残量が少しずつ減っていることが翌日判明します。これは…。落雷で機器の電源装置がショートし、予備電源に切り替わっていたのです。電源装置の交換を余儀なくさせられました。

しかもこれで終わりではありませんでした。9月4日、また雷雨がありました。先日壊れた電源装置をちょうど交換した日の夜です。後日、データを確認すると落雷回数は271回、2日前の4倍に達する数でした。3時間にわたり落雷が続き、1km未満の落雷も40分間に相当数ありました。当然、変えたばかりの電源装置はアウト!でした。

このような予想外のトラブルは野外観測では当たり前のように起こります。太陽計器さんの名誉のためにも、落雷による電源装置のショートは全国でもほとんど例がないそうです。これから慌てることなく対策を講じようと思っています。このような雷雨は一年の中でもわずかな日数でしかありません。しかも志木を直撃するなんて本当にまぐれのようなことです。太陽計器さんの会社のある戸田にもCampbellが設置されているそうですが同日の雨量は2ミリ、落雷も遠くで(=志木で?)あったと記録されていたそうです。

そろそろお彼岸です。暑さ寒さも彼岸まで。夏の終わりの激しいできごとでした。次は台風対策をするのかな。



新しく設置したCampbell社製の複合気象観測装置

秋は展覧会の季節である。日本の美術館・博物館(以下ミュージアムと呼ぶ)は春と秋に力の入った展覧会をすることが多いが、今年の春は緊急事態宣言が出たために中止になった展覧会も多かった。身近なところでは、大宮公園にある埼玉県立歴史と民俗の博物館(弓道場の目の前にある)で、3月20日から開催予定だった特別展「武蔵国の旗本」も中止になった。その代わり、同館では7月18日から9月6日まで、「特別展「武蔵国の旗本」を振り返る」という夏の特集展示が行われた。

そもそも多くのミュージアムの展示には、常設展と特別展がある。常設展は文字通りなら、ずっと同じものを展示しているはずだが、実際にはそうした館は少なく、展示はしばしば入れ替わる。ただ、たいていは館が所蔵するコレクション(館蔵品)の中から入れ替えるので、一度引っ込んだものもしばらくすればまた展示されることが多い。一方、特別展は、他のミュージアムや寺院・神社・個人などから、その展覧会の時だけ借りてきて開催される。これはその時にしか見られない。

中止になった特別展「武蔵国の旗本」は、県内各地の寺院などから、江戸時代の旗本(将軍直属の家臣で、禄高1万石未満、かつ将軍に御首見を許された者)にまつわる資料を借り集めて開催される予定だった。担当した学芸員はそのための入念な現地調査、展示作品を借りるための地道な交渉を行っていたはずである。

代わって行われた夏の特集展示は、この特別展で使われるはずだった解説パネルの一部を利用し、館蔵品や寄託品(所蔵者が博物館に預けている資料)によって特別展の内容を紹介したものだった。将軍や大名に比べて注目されることの少ない旗本について、甲冑や肖像画など、実物にもとづいて紹介・解説した内容は興味深いものだったが、最後には使われなかった大量の解説パネルの山が展示されていて、担当学芸員の無念さも感じることができた。展覧会を企画したことで得られた新しい知見を一部でも市民に還元しつつ、報われなかった苦労も知ってほしい、そんな特集展示だったわけである。

高校生にとって、ミュージアムは少し敷居の高い場所かも知れない。でも、前近代には一部の人間にしか見ることがかなわなかった素晴らしい美術品や貴重な歴史資料を、誰もが見られるのがミュージアムである。「武蔵国の旗本」も、きらびやかな美術品は展示されなかったかも知れないが、普段は目にできない資料が集まり、広く紹介される貴重な機会だったはずなのだ。

ミュージアムを楽しむコツは、「楽しませてもらおう」と思って行かないこと。ミュージアムの側ももちろん工夫しているが、どう楽しむかはその人次第である。ミュージアムは、学ぶことを楽しむ場だと言っても良い。これは学校も同じだが、学校には卒業がある。ミュージアムは生涯にわたって楽しめる。早いうちからなじんでおいて損はない(大宮公園の博物館は学生半額。東京国立博物館の常設展は高校生無料である)。

もう一つ、ミュージアムが学校と違うのは、実物が見られること。実物を前に考えることに大きな意味があるので、リモートにするのは難しい。6月以降、多くのミュージアムが感染症対策をとって再開しているが、公共交通機関の利用にはまだ不安があるかも知れない。まずは近所のミュージアムに、もう少し落ち着いたら、ぜひ各地のミュージアムを訪れてもらいたい。

慶應はいま新しいミュージアムを三田に建設中である(慶應義塾ミュージアム・コモンズ、略してケムコ)。 建物は9月中旬に完成し、来春オープンするとのこと。どんな場所になるのか分からないが、みんなが 大学生になって授業やサークル活動で三田を訪れた時、ついでにケムコにふらっと立ち寄る、ケムコに はそういう場所に、志木高生にはそういう大学生になってほしいと思う。



埼玉県立歴史と民俗の博物館





中止になった展覧会のチラシ

今年はCOVID-19の影響で校内に咲く下のイラストに描かれた花を目にする事ができた人は少ないかもしれない(普段でも少ないが…)。レースのような芸術的なこの花を咲かせるのはカラスウリ(烏瓜)である。虚子編『季寄せ』によれば、「烏瓜の花」は7月の季語。「烏瓜(実の方)」は10月の季語である。この季節、その移りかわりの中で「ウリボウ(瓜坊:本来はイノシシの子のこと)」と呼ばれる縦縞の未熟な果実をつける。これが熟すと赤くなる。残念だが、食用にはならない(熟した果実の中身は種と繊維のみ)。カラスウリが『救荒植物』として重用されるのは、地面に伸びた茎の先に『塊根』と呼ばれるデンプン質に富んだ芋状の組織を作るからである。こちらは食用になる。

[2020年7月~2020年9月までの開花情報]

Grass

27. Jul. 2020 メヒシバ, ヤブラン, ヒメムカシヨモギ

5. Aug.2020 キツネノマゴ,コナスビ

15. Aug. 2020 ツルボ, コニシキソウ, ヤマノイモ, ママコノシリヌグイ,ヒナタイノコヅチ

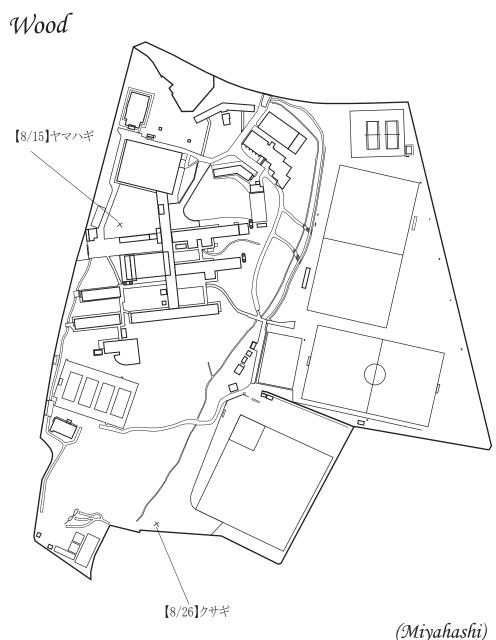
26. Aug. 2020 (ノビル, キランソウ),ヤブタバコ, チヂミザサ

5. Sep.2020 センニンソウ, ヌスビトハギ

*()内は狂い咲き



【カラスウリ】 ウリ科カラスウリ属



この限られた紙面では、名前の出ている植物や動物がどのようなものであるかをお示しする事は不可能です。 名前を手がかりにぜひ図書館などで一度調べてみてください。

執筆•担当区分	天文•気象	樋口 聡 (Higuchi)
	歴史・美術	原 浩史 (Hara)
	動物	栗田 くり菜 (Kurita)
	植物・地質 他[&発行責任]	宮橋 裕司 (Miyahashi)
	編集•植物画	荒巻 知子 (Aramaki)